

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

94

母は、八十歳を迎えるころから五葉登山した思い出を口にするようになった。年に数回、我が家に泊まりに来るようになって、手入れの行き届かない庭を一日がかりで見事なまでに見違えらせてくれる。

二〇〇八年六月、五葉山麓の裾野がツツジで赤く染まるころであった。母はいつものように庭に出て花々を眺めながら、今はいない父と一緒に五葉登山したときのことを語り始めていた。

「そうだ！今なら母も自分の力で畳石まで行けるかもしれない。そう思うと無性に思い出を訪問してみたかった。早期退職したばかりの妹

に急いで連絡した。躊躇していた母であったが「妹も行くと言っているよ」と話すと「じゃ、言ってみるか」と心を動かした。簡単な昼食を準備し、登山入り口の赤坂峠に向かう。数日前、新聞でツツジが見ごろと伝えていたので、母も私もワクワクした。

畳石を目指し赤坂峠を出発した。中学生の姪は母の末孫であり五葉登山が初めてと語った。母は娘や孫に手を繋がれてゆっくりと二歩一歩登山道を進む。杖をつきながら「変わったなあ、変わったなあ」と何度も口にした。鷹生ダムができ、五葉病生活に入った。六年七

けると鹿は立ち去ってしまった。下山を始めるとう白髪の女性が手を引かれて上っている。自分より高齢と見た母は「私は八十五歳だとも、こうして娘や孫に連れられてツツジ見に来たのさ。何歳でヤンベ」と聞くと、その女性は七十歳代であると告げた。「母さんのほうが若々しく歩いているよ」と言う「おれだけだ

行う手足の運動や体操を今後も続けることを勧め、「毎朝晩のお勤めは大きな声ですることが大事よ。健康の秘訣だよ」と付け加えた。

あれから二年。今年八十七歳になった母から五葉登山の思い出は聞いていない。きっと母はめぐり来る季節の中に父の思い出、若かりしころ、幼かったころのことを胸の奥深く、顧みているのかもしれない。

「きれいだね、ジイ」

住田町世田米 多田 まり子

温泉が建ち、そこに至る道路も二車線の舗装道路となっていたからだろう。ツツジの群落は花の盛りを過ぎていたが、花の多さからついこの間まで見事に咲き誇っていたことを知る。

母は、バッグに手をやった。その中から丁寧に包まれた小さな紙片を取り出した。父の写真が入っていた。「きれいだね、

カ月後に他界するまで、母は看病に精を出した。元気で何事にも前向きだった父を懐かしく思い出した。母はツツジを背景にカメラにおさまった。畳石でくつろいでいると、二頭の鹿がどこからともなく現れ、目の前でゆっくりと草を食んでいる。ゆったりとした時間が流れる。頂上を目指す二人連れ登山者が姿を見

べ、この歳で五葉山に登ったのは。親子の会話が弾む。

五葉温泉でゆっくりと湯につかり汗を流した。「今日はお疲れ様。母さんが健康でいるおかげでこうして登山ができるんだよ。これからも身体に気をつけてね」。年若い母であるだけにいつまでも元気でしっかりして

リレー
エッセイ



25年前の思い出がよみがえった五葉登山。4合目の畳石で記念写真に収まる筆者と母、妹親子（左から）